

興味を示さない。父親は彼を農場の後継者として鍛えるべく、親戚が営む山の上の牧場に働きに出す。ところが、彼は父親のもくろみとは反対に、牧場の人々を感化して音楽好きにしてしまう。自覚のないままに自分の好きな音楽に人々を巻きこむところに主人公の音楽の天才としての片鱗を示す方法は、あまり例を見ないものだが、彼が特別な力を持つことを理解させる上で説得力がある。

しかしこの物語では、無意識のうちに才能を示すことは、音楽家になるための条件として十分ではない。頑固なヴィンチの父親と、父親を説得してヴィンチに音楽の専門教育を受けさせたいと思っているデルリックさん（ヴィンチの家に下宿している都会人）とでは、考え方が全く違うようであり、ひとつの共通認識がある。ヴィンチの父親にとって、音楽家は「亭主は破れヴァイオリンをさげて、女房はボロを着て、キーキー声で歌を歌って、おふせを投げてもらう」というものだが、デルリックさんはそのイメージを修正しようとはしない。彼はヴィンチを、「旅の音楽師とはまったくちがった形で仕事をしている、りっぱな、才能にめぐまれた音楽家」として育てたいのである（註3）。

ヴィンチはとりあえず一年間、都会で教育を受けることになる。そして一年後、父親はフライブルクの教会で息子の荘厳なオルガン演奏に感動し、心を開く。才能ある少年は、正統的な教育によって「精神性」を身につけることで

はじめて、音楽家への道を歩むことが許される。このとき音楽は、単なる楽しみにとどまるのではなく多くの人々に崇高さを与える、「公的」な役に立つものとして、その価値を認められる。

『花物語』と舶来の音楽

欧米のいわゆるクラシック音楽が日本に積極的に導入されたのは、明治維新後、一八七九（明治一二）年に文部省内に「音楽取調掛」が開設されたからのことである。日本で本格的に演奏、作曲、音楽教育活動が展開されるようになったのは一九〇〇年前後からということを考えれば、一九一八年に最初の一篇が発表された吉屋信子『花物語』にしばしば音楽が登場するのは、早い反応といえる。もっとも、音楽の出でくる箇所を読んでみると、

もう一度、あの美しい幻のやうな少女の面影が見たいと望みました。私は、マンドリンをさげた妹と、いつしよに、あの砂丘の後の洋館の前を、そゞろ歩きをしました。あたりは、いつとはなしに黄昏て夕暗は忍び足して近より、遙み空には銀の星が輝きました。——マリアの瞳のやうに——。

その寂しさ静けさに浸った時、たゞあの何んとも言ひ知れぬインスピレーションに私は強く打たれましたの